



# Islamic Republic of Pakistan

EARTH GALLERY Vol.137 [パキスタン・イスラム共和国]

地球ギャラリー  
写真文・鈴木革 (写真家)

# 谷に戻った笑顔

スワート川南岸の古代要塞から見下ろすバリコットは、紀元前にマケドニアのアレクサンドロス大王が攻め入った町だ。

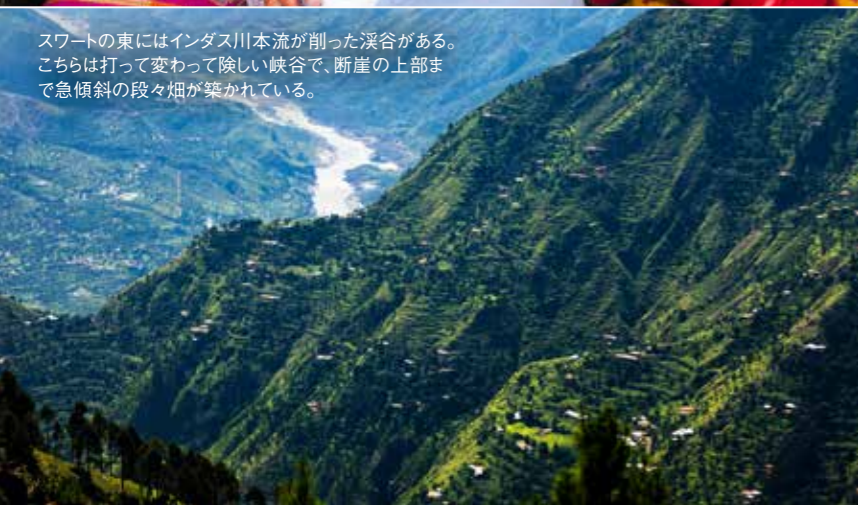
古代要塞から眺めるスワート渓谷。広大な川面と中洲の緑地帯が描くモザイク模様美しい。



スワート渓谷の東南にある古いヒンドゥー教の聖地エラム山に向かう道。山奥にも集落が点在するため、険しい道だが人畜や物資の往来は多い。



カラフルな民族衣装を身につけた子どもたちの背後にあるのは仏教の聖地ジャンカルダール大塔。3世紀ごろに建てられた高さ30m、直径13mの巨大ストゥーパだ。



スワートの東にはインダス川本流が削った渓谷がある。こちらは打って変わって険しい峡谷で、断崖の上部まで急傾斜の段々畑が築かれている。



エラム山付近の深い峡谷にある滝。岩壁を横断する溝は、年代不詳の古代岩石彫刻だという。



ミンゴラはスワートの社会・文化・経済の中心地。にぎやかな南アジアのたたずまいをすっかり取り戻していた。



聖地エラム山の山岳路で出会った仲良し二人組み。仁義に厳しい山地のイスラム世界だが、人柄の良さは折り紙つき。



路肩の掘っ立て小屋で魚フライを作る男性。魚の種類が豊富なスワート川周辺ではこのようなワイルドな露天レストランが見られる。



スワート川支流の水辺で遊ぶ男たち。楽器を鳴らし、ダンスに興じる。濃い南アジアの顔に、穏やかな笑みが浮かんでいる。



この旅は、現地受け入れ先の決まりによって、全行程に護衛警官がついた。観光資源の多い土地ゆえ、今後のさらなる安定化が望まれる。

2014年、パキスタン女性マラソンが、史上最年少の17歳でノーベル平和賞を受賞した。受賞にいたるきっかけとなった12年の、当時中学生だった彼女への武装勢力による銃撃は世界を震撼させた。今回紹介するパキスタン北部の山岳地帯スワート地方は、その悲劇の舞台となった場所でもある。

私が初めてスワート地方を訪れたのは00年の初夏だった。本来、この地方は涼やかな気候によってパキスタン国内では避暑地として知られ、風光明媚な景観は『東洋のスイス』とも称されており、国民の憧れの地であった。そもそもスワートは、ヒンドークシユ山脈から発するスワート川が造った大渓谷で、上流部は5000メートル超級の険しい高山や氷河が織り成す絶景地帯である。最奥部にはかろうじて隣の谷へ続く4駆車用の悪路が通っているが、一歩離れるとまさに人跡未踏の地域だ。一方で、広大な氾濫原を擁する中下流域は豊富な水量をリソースとする穀倉地帯であり、季節折々の田園の色彩が山河を背景に冴えわたっている。南のガンダーラ平原と隣接する関係から、流域にも多くの仏教史跡が点在しており、もう一つのガンダーラ文化圏として重要な歴史の舞台でもある。

そんなスワートを突如として困難が襲った。07年のパキスタン・タリバーン

運動（TTP）だ。隣国アフガニスタンのタリバーン勢力の影響を受けて、パキスタン政府の打倒とイスラム法統治を掲げる反政府組織が結成され、渓谷はその支配下に置かれた。09年には政府軍が進攻して和平が結ばれたが、その後もテロ行為が止むことはなかった。皮肉にも入り組んだ峽谷が隠れ家となり、政府軍の掃討作戦もなかなか成果が上がらなかったという。それどころか政府軍の攻撃が民間人にも被害を及ぼし、中央とは異なる民族意識を持つ土地柄ゆえ、住民の思ひも複雑であった。この頃、混乱から逃れた難民が100万人を超えたともいう。TTPはとくに女性の社会進出や教育を執拗に弾圧し、その象徴として女性権利を主張するマララさんが狙われたのである。しかしこうした暴挙は、同じイスラム世界からも非難を浴び、もちろん国民の大多数が嫌悪するものであった。こうした世論を背景に、また政府の危機意識も後押しして、政府軍の掃討戦も次第に効果を上げ、近年になってやっと安定化の兆しが見えたのである。

今回の旅ではスワート本流をはずれ、東隣のインダス渓谷に挟まれた山間地シャングラ地方にも足を延ばした。この一帯は切り立った小峽谷が毛細血管のように入り組んでおり、見上げると首が痛くなるような崖の連続である。車道終点

から歩き始めると、意外にも峠道の往来は多く、荷物を担いだ人々やロバの団に出会う。実は峽谷は山地民族が暮らす土地であり、崖のような急傾斜地には段差が幅の3〜4倍もある常識はすれの段々畑が幾層もへばりついている。この垂直な田園風景は世界でも珍しく、その暮らしの過酷さを別にすれば、まるで桃源郷のようにも思える美しさだ。

TTP支配下の話を聞くと、数少ない楽しみである音楽や踊りも禁止され、人々は息を潜めて暮らしていたという。しかし今では、街の商店にはふつうに品物が並び、買い物客がビニール袋を提げて歩いている。通りでは排ガスをまき散らしながら車両が行き交い、見慣れた南アジアの景色がある。谷間の水辺で憩う人々は素足でせせらぎを散策し、楽器を抱えた一団が踊りに興じている。20年ぶりに訪れたスワートは争いの爪痕を残しつつも、かつてと同じ美しく穏やかな土地として再生を始めていた。やはり平和はいものだと、フラインダー越しに人々の明るい表情をとらえて思うのだった。

鈴木 草（すずき かく）

1956年秋田県生まれ、85年の解放間もないチベットの取材を皮切りに、開発途上国や秘境を中心に50か国以上、200件近くの世界遺産を訪れる。著書に『森谷公俊氏』歴史学者との共著『図説 アレクサンドロス大王』（河出書房新社）がある。



左：スワート地方の南側はガンダーラ平原。写真は下界を隔絶するために仏僧たちが築いた山岳要塞僧院タフティバヒー。右：インダス渓谷の山頂に広がる高原地帯。アレクサンドロス大王の合戦があったといわれる秘境だが、今ではのどかな遊牧地である。